

風雲すき焼き鍋

粉雪舞う冬の夜の食卓。すき焼き鍋がぐつぐつと音を立てている。鍋の中では肉を中心
心にネギや豆腐などが整然と並んでいる。鍋を囲むのは初老のご夫婦と成人したお嬢様の親子3人。6つの目はらんらんと輝き、いずれも中央の肉に注がれている。

やがて程よく煮え立った頃、真っ先にご主人の箸が肉に伸びる。その時である、奥様の声が響き渡りバトルが始まった！

「なんであなたが先に肉を取るのよ!」

「一家の主だ。あたりまえだ。」

「娘に先に食べさせるくらい
の分量はないの?」

「何を言ってるやがる!男は蛋白質が必要だ」(意味不明)

「蛋白質なら豆腐があるでしょ。」

よ。豆腐を先に食べなさい!」

突然のご指名に豆腐はさぞかしビックリしたと思うが、それはさておき、憤懣やるかたないご主人は怒りをぶつつ

ける。

「俺が先に肉を食ったら悪いのか?なんで俺を後回しにする?」

それに応えて奥様がトドメを刺す。

「娘と私は血が繋がってるけど、あなたとは繋がってないわね!」

煮え立つ鍋の中で、ワリシタが泡立ち、豆腐が揺らぎ、ネギが踊ってる。その様子はまるで鍋全体が笑い転げているようだ。気が付くとご主人の箸が引き下がり、お嬢様の箸が肉をとらえた。奥様の見事なKO勝ちであった。

注 このお話はフィクションであり、実在する人物、家庭とは一切関係ありません。